

につけい

なや

げいじゅつ

しょうか

日系の悩みを芸術に昇華

造形作家上西エリカさんが個展

“融合”テーマの作品『庭』

「様々な融合を作品に込めた」と。パラナ州出身で現在パリに在住するアーティスト、上西エリカさん(32、三世)が今月29日から、聖市内のギャラリー「FUNARTE」(Alameda Nothman, 1058, Santa Cecilia)で個展『庭』(Jardin)を開く。留学先の日本でアイデンティティに悩んだりとを糧に「融合」を作品のテーマに置き、旺盛な制作活動続ける彼女に話を聞いた。

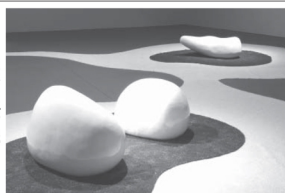
FUNARTEで今月28日から



上西エリカさん

「ずっと悩み続けた」。その壁を打ち破ったのは、ポルトガル出身の詩人、フェルナンド・ベッソアの詩だった。「自分の道、相手の道」。

江戸時代の地図をまわりてベッソアの詩をびっしりと敷き詰めた作品を



個展作品『庭』

作るなかで、「どちらかにルーツを探すのではなく、融合した日系人であることが自分らしさと思うようになった」と語る。

以来、「融合」という言葉はエリカさんの芸術活動に大きな影響を与えるようになる。芸術と観客との関係性も変換させる試みも始まった。

去年8月に開催された『愛知トリエンナーレ』の出品作品は、彼女が真っ白なバズルに輪郭を描き、来場した子供達がその中のピースに絵を描くというもの。

今回の個展で披露する作品は『庭』。石にプラステック、苔にビニールという自然と人工の融合を試み、枯山水を模した

庭園が広がるインスタレーション(空間芸術)。来場者がベンで自由に絵を描き込める参加型の作品だ。

「日本庭園は仕切りの外から静かに見るもの。一方、賑やかな幼稚園もJardin da infancia(子供の庭)。その隣たりを組み合わせたかと思つた」。芸術をもっと身近に感じてほしいという思いも込める。

「未完成である私の作品を、ベンを持った参加者たちがどう完成させるか、私にもわからない。でもそれが芸術の楽しさ」と笑う。

「自分の道は一人ではなく、誰かと描いていくもの」。静かに語るそんな思いを彼女は作品に代弁させようとしているのかもしれない。

◎

上西エリカ個展『庭』は今月29日(7月31日午後2時~10時)まで「FUNARTE」(Alameda Nothman, 1058, Santa Cecilia, tel. 11-3822-5671)で開催される。なお、28日午前10時からオープニングが行なわれる。

パラナ州クリチバ市で生まれた。幼い頃から建築に興味があり、製図を学ぼうと入学したパラナ州芸術大学でアートの楽しさに出会い、美術の基礎を学ぶ。

大学卒業後、22歳で文部科学省留学生として渡日。日本大学大学院「祖父母の祖国であり空想の対象だった日本生まれ育ったブラジル・アイデンティティについて」